

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

ホテル秀水園社員寮建設に伴う
確認調査報告書

MINAMISURIGAHAMA - SITE

南 摺 ヶ 浜 遺 跡 II

1993年3月

鹿児島県指宿市教育委員会
有限会社 ホテル秀水園

序 文

本書は、指宿市湯の浜に所在する南摺ヶ浜遺跡において行われた確認調査の成果をまとめたものです。

調査成果の主なものを挙げますと、まず、縄文時代晩期の良好な包含層が確認されました。縄文時代晩期は、狩猟や採集を中心とした縄文時代から弥生時代の農耕社会への転換期にあたる時期で、わが国の一大変革期といえます。この時期の資料が多数得られたことは極めて貴重なこととすることができます。

また、縄文晩期の地層から日本本土で初めて南西諸島の土器が出土しました。この土器は「宇宿上層式土器」と呼ばれるものです。縄文時代に南西諸島の広範囲な交流が成立していたことが証明されたことは大変意義深いものと思われまます。

この発掘調査により、南摺ヶ浜遺跡の価値がますます高められたものと確信すると同時に、本書が皆様に活用され、南摺ヶ浜遺跡の適切な保存に役立てられることを願ってやみません。

この発掘調査に物心にわたり御協力頂きましたホテル秀水園の皆様方、並びに御協力を頂いた関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成5年3月31日

指宿市教育委員会教育長 中 村 利 廣

例 言

1. 本発掘調査報告書は、平成5年1月18日から平成5年2月3日までに実施した、鹿児島県指宿市湯の浜6丁目21番地1号に所在する南摺ヶ浜遺跡における確認調査報告書である。
2. 本発掘調査の費用の501千円は有限会社ホテル秀水園が負担した。
3. 本発掘調査及び整理・報告書作成は指宿市教育委員会が実施し、発掘調査は下山 覚，渡部 徹也が担当した。
4. 整理・報告書作成は下山覚，渡部徹也が主に実施し、遺構，遺物の原図作成・製図については，その責を明らかにするために目次に作成者名を記す。なお，原図作成者をⒺ，トレース実施者をⒻと表記する。
5. 写真撮影および図版作成者は，現場関係を渡部徹也が，遺物関係を中摩浩太郎がこれを行った。
6. 本編の執筆は，下山覚，渡部徹也，鎌田洋昭が分担して行った。
7. 本書の編集は，下山覚が行った。
8. 本書中のレベルはすべて絶対高である。
9. 遺物実測図No写真No文中のNoは一致する。
10. 遺物観測表，実測図，遺構図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」（1992，指宿市教育委員会）に準ずる。

本文目次

第Ⅰ章 確認調査に至る経緯	1
第1節 確認調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第Ⅲ章 確認調査	3
第1節 層位	3
第2節 遺構	4
第3節 遺物	4
第Ⅳ章 確認調査の成果	22

表目次

第1表 第11層上面で検出されたピット法量表	4
第2表 出土遺物観察表①	18
第3表 出土遺物観察表②	19
第4表 出土遺物観察表③	20
第5表 出土遺物観察表④	20
第6表 出土遺物観察表⑤	21

図版目次

P 1.1 現場写真	25
P 1.2 出土遺物	26
P 1.3 出土遺物	27

挿図目次

第1図	発掘調査地点図 (S = 1/600) (原渡部 [㊦] 新小田)	2
第2図	トレンチ層位断面図 (S = 1/30) (原渡部 [㊦] 新小田, 清, 上高原)	5
第3図	遺構平面図及び断面図 (S = 1/60) (原渡部 [㊦] 同上)	6
第4図	遺物出土状況図 (S = 1/40) (原渡部 [㊦] 同上)	7
第5図	出土遺物実測図① (S = 1/2) (原下山 [㊦] 下山)	8
第6図	出土遺物実測図② (S = 1/3) (原下山 [㊦] 下山)	9
第7図	出土遺物実測図③ (S = 1/3) (原下山 [㊦] 下山)	10
第8図	出土遺物実測図④ (S = 1/3) (原下山 [㊦] 下山)	11
第9図	出土遺物実測図⑤ (S = 1/3) (原下山 [㊦] 下山)	12
第10図	出土遺物実測図⑥ (S = 1/3) (原渡部 [㊦] 鎌田)	13
第11図	出土遺物実測図⑦ (S = 1/3) (原渡部, 下山 [㊦] 鎌田)	15
第12図	出土遺物実測図⑧ (S = 1/3) (原渡部, 下山, 西谷, 横手, 鎌田 [㊦] 鎌田)	16
第13図	出土遺物実測図⑨ (S = 1/2) (原渡部 [㊦] 鎌田)	17
第14図	出土遺物実測図⑩ (S = 1/4) (原渡部 [㊦] 鎌田)	18

第 I 章 確認調査に至る経緯

第 1 節 確認調査に至る経緯

南摺ヶ浜遺跡は、昭和38年に発見されて以来、⁽¹⁾いわゆる「成川式土器」を中心に採集が行なわれて来ており、平成4年6月には、ホテル秀水園の増改築工事の際に、古墳時代の遺物が出土したことから緊急確認調査を実施した経緯がある。⁽²⁾

その際に、指宿市教育委員会と有限会社ホテル秀水園との間で「発掘調査確認書」を取り交わし、将来における開発行為の事前通知および発掘調査の実施についての確認が行なわれた。

その後、平成5年1月13日に、秀水園社員寮建設計画について通知され、平成5年1月18日にホテル秀水園と指宿市教育委員会間で協議が行なわれた。

その結果、平成5年1月18日から平成5年2月3日までの確認調査を実施し、その結果をもって再協議を行なうこととなった。

確認調査の結果、当地で縄文時代晩期の良好な遺物包含層の存在が確認され、建設に際しては包含層を破壊せず、将来、社員寮の増改築においては全面的発掘調査を実施する確認書を取りかわした。

確認書は、「南摺ヶ浜遺跡Ⅰ」（1993、指宿市教育委員会）に掲載のものと同様式であり、発掘調査確認書については指宿市教育委員会にて保管している。

(1) 昭和38年8月にホテル秀水園造成工事において遺物が採集された。

(2) 指宿市教育委員会1993「南摺ヶ浜遺跡Ⅰ」

第 2 節 調査の組織

発掘調査の組織は以下の通りである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	
発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中村利廣
発掘調査担当者	指宿市教育委員会社会教育課長	籠原眞吾
	指宿市教育委員会社会教育課長補佐	山澤郁夫
	指宿市教育委員会社会教育課派遣社会教育主事	塩入俊実
	指宿市教育委員会社会教育課文化係長	今村新作
	指宿市教育委員会社会教育課文化係主査	久保憲一郎
	指宿市教育委員会社会教育課主事	弓指恒子
発掘調査員	指宿市教育委員会社会教育課文化係主事	下山 覚
	同 上	渡部徹也
発掘調査作業員	渡瀬ヤナギ, 吉元キヨ子, 浜崎イチ子, 吉留紀代子, 東 富子 竹下カツエ, 下之園トシ子	
整理作業員	上高原信子, 清 秀子, 新小田香代子, 前田恵子, 徳留逸子 西谷 彰, 横手浩二郎 (以上鹿児島大学学生)	

(文責 下山)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境⁽¹⁾

指宿市は、薩摩半島の南端に位置し、地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分けられる。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は、約5,500年前に活動し、その噴出物は指宿地方の地形形成の大きな要因となっている。

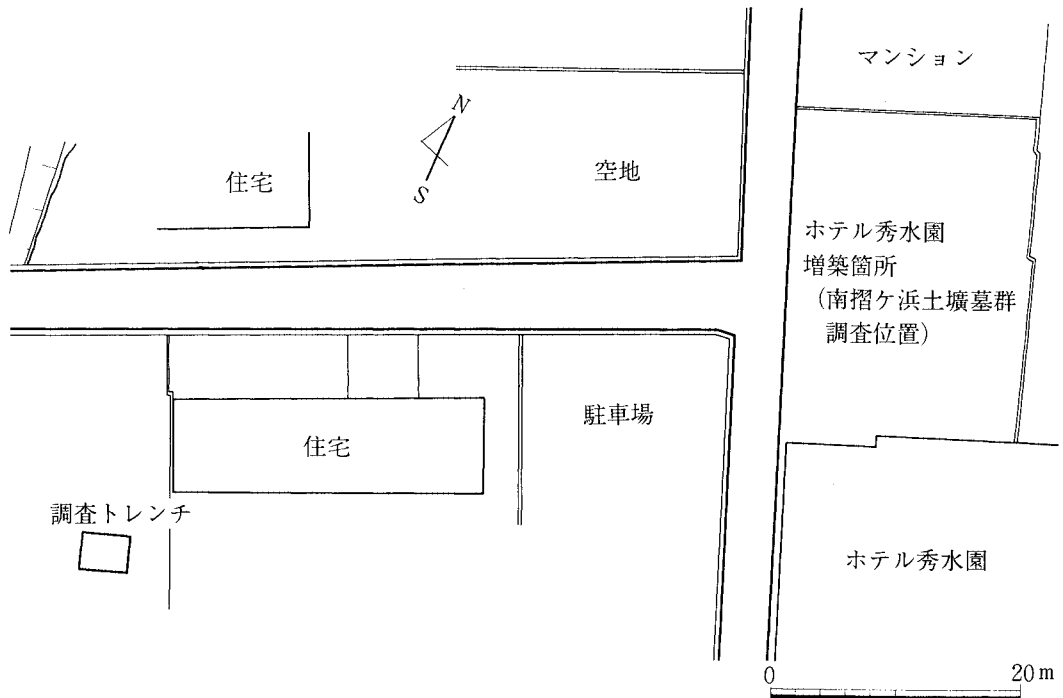
指宿市に南接する開聞町にはトニコロイデ型の火山として有名な開聞岳がある。その活動は約4,500年前頃から始まり、有史以来、「日本三代実録」にもその活動記録が見える。開聞岳起源の噴出物は広くこの地方を被覆する。

開聞岳起源の噴出物堆積層は、通称、黄コラ（縄文時代後期降下）、暗紫コラ（弥生時代中期後半～後期前半）、青コラ（7世紀第4四半世紀）、紫コラ（貞観16年：西暦874年）などの他、近年、縄文時代晩期に相当するテフラが確認され、大きな活動が5回あったものと推定されている。

南摺ヶ浜遺跡は、指宿市の市街地海浜部に面した海岸段丘上に立地しており、山裾から海岸へ傾斜する火山性扇状地地形の端部に位置する。平成4年度に確認調査が行なわれた「南摺ヶ浜土壙墓群」は本遺跡の一部分にあたる。

「南摺ヶ浜土壙墓群」の確認調査では、古墳時代の土壙墓や縄文時代晩期の良好な遺物包含層が確認されており、今回の調査においても古墳時代や縄文時代の晩期の遺構、遺物が検出されることが期待された。

(1) 指宿市教育委員会「南摺ヶ浜土壙墓群」1993を抜粋。



第1図 発掘調査地点図 (S = 1 / 600)

第Ⅲ章 確認調査

第1節 層位

南摺ヶ浜遺跡の地層は基本的には、池田湖噴出物や開聞岳噴出物とそれらの間に挟まる扇状地堆積物等から形成されている。以下南摺ヶ浜遺跡の標準層位について述べる。

第1層 現代の表土

第2層 黒灰色土層 本調査地点においては欠落している。(第3層に対応)

第3層 a 黒色土層 本調査地点においては欠落している。(第4層に対応)

第3層 b 黒褐色土層 本調査地点においては欠落している。(第4層に対応)

第4層 a 紫灰色火山灰層 本調査地点においては欠落している。(第5層 a に対応)

第4層 b 第4層 c の二次堆積層 本調査地点においては欠落している。(第5層 b に対応)

第4層 c 紫灰色火山灰層 貞観16年(西暦874年)の開聞岳火山灰。最下部には火山礫が堆積。(第5層 c に対応)

第5層 暗オリーブ褐色土層 暗オリーブ褐色土層で、下部に若干の砂を含む。(第6層に対応)

第6層 青灰色固結火山灰層 7世紀最終四半世紀頃の開聞岳火山灰。最下部にはスコリアが堆積。(第7層に対応)

第7層 暗赤褐色土層 古墳時代の遺物包含層。(第8層に対応)

第8層 第6層と一連の開聞岳の活動に伴うスコリア堆積層 (橋牟礼川遺跡の第7層前期ステージ堆積物と対応)

第9層 a 黒褐色土層 古墳時代の遺物包含層。(第9層に対応)

第9層 b 黒褐色土層 基本的には、第9層 a と同質の土層。上層に比してやや黒っぽい。(第9層に対応)

第10層 暗黒褐色土層 本調査地点においては欠落している。(対応する層位は不明)

第11層 a 暗紫色火山灰層 弥生時代中期頃の開聞岳火山灰。(第11層に対応)

第11層 b 黒褐色土層 小礫を含む。弥生時代の遺物包含層に比定される。(第10層～12層に対応する可能性がある。)

第12層 a 黒色土層 縄文晩期の遺物包含層 (第13層に対応する可能性がある。)

第12層 b 黒色土層 縄文晩期の遺物包含層 上層に比してやや黒い。(第13層に対応する可能性がある。)

第13層 黒褐色土層 縄文晩期の遺物包含層 (第14～16層に対応する可能性がある。)

第14層 暗オリーブ色シルト質土層 (第17層の二次堆積層の可能性あり。)

第15層 黄色火山灰層 (黄コラ：第17層に対応)

第16層 オリーブ色～明黄褐色土層 (対応する地層は不明)

第17層 黄褐色砂質土層 (第18層に対応)

上記の土層名は、南摺ヶ浜土壠墓群で新たに付された名称であり、各層と橋牟礼川遺跡標準層位との対応関係については()内に記した。

第12層については、小礫を多く含み、やや褐色味のある土層を第12層 a、橙色～赤色粒子を多くふくみ、黒味が強いサラサラした土層を第12層 b とした。各土層の色調については、「標準土色帖」を基準とし、第2 図中に記した。

なお、本調査地点においては、第12層 b までの確認で調査を終えたため、第13層以下第17層については検出していない。

(文責 渡部)

第2節 遺 構

遺構は、第11層 a および b の上面において、第9層を埋土とするピットが8基検出された。調査区面積が狭小なことからピット間の関連については不詳であった。以下各ピットの法量について記す。

ピットNo	上場径 (cm)	下場径 (cm)	深 さ (cm)	備 考
1	Ⓛ18 ㊦18	Ⓛ9 ㊦7	76	古墳時代
2	17	Ⓛ8 ㊦7	59	古墳時代
3	Ⓛ27 ㊦22	Ⓛ8 ㊦8	94	古墳時代
4	Ⓛ15 ㊦14	Ⓛ5 ㊦5	26	古墳時代
5	Ⓛ18 ㊦17	Ⓛ10 ㊦8	96	古墳時代
6	Ⓛ17 ㊦16	Ⓛ7 ㊦6	64	古墳時代
7	Ⓛ15 ㊦15	Ⓛ5 ㊦5	18	古墳時代
8	Ⓛ13 ㊦11	Ⓛ4 ㊦3	16	古墳時代

第1表 第11層上面で検出されたピット法量表

第3節 遺 物

本トレンチでは遺物は主に第11層、第12層から出土した。

(1) 第7層出土遺物 (一)

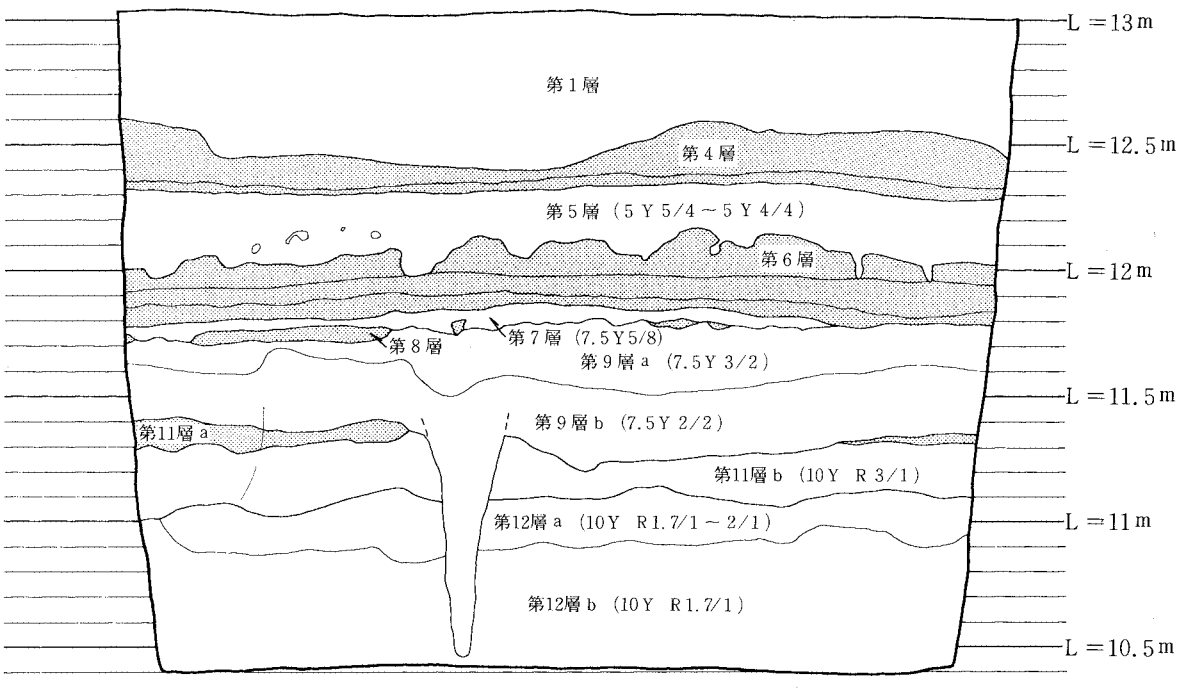
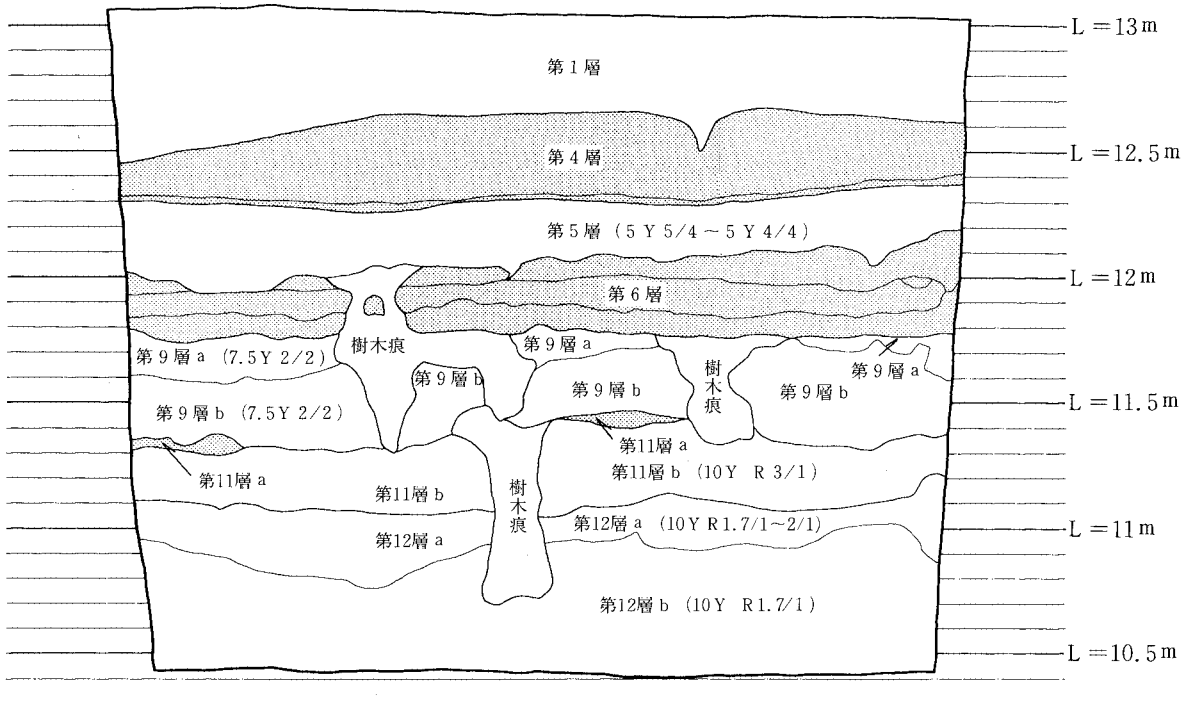
第7層からは5点の遺物が出土した。いずれもいわゆる「成川式土器」の極細片である。

(2) 第9層出土遺物 (10)

第9層からは15点の遺物が出土した。いわゆる「成川式土器」の細片が主体であるが、10等の縄文時代晩期の遺物が若干混在する。10は縄文時代晩期深鉢形土器の口縁部文様帯下部である。口縁部文様帯には1 + α 条の沈線が施される。いわゆる「上加世田式土器」に帰属するものと考えられる。

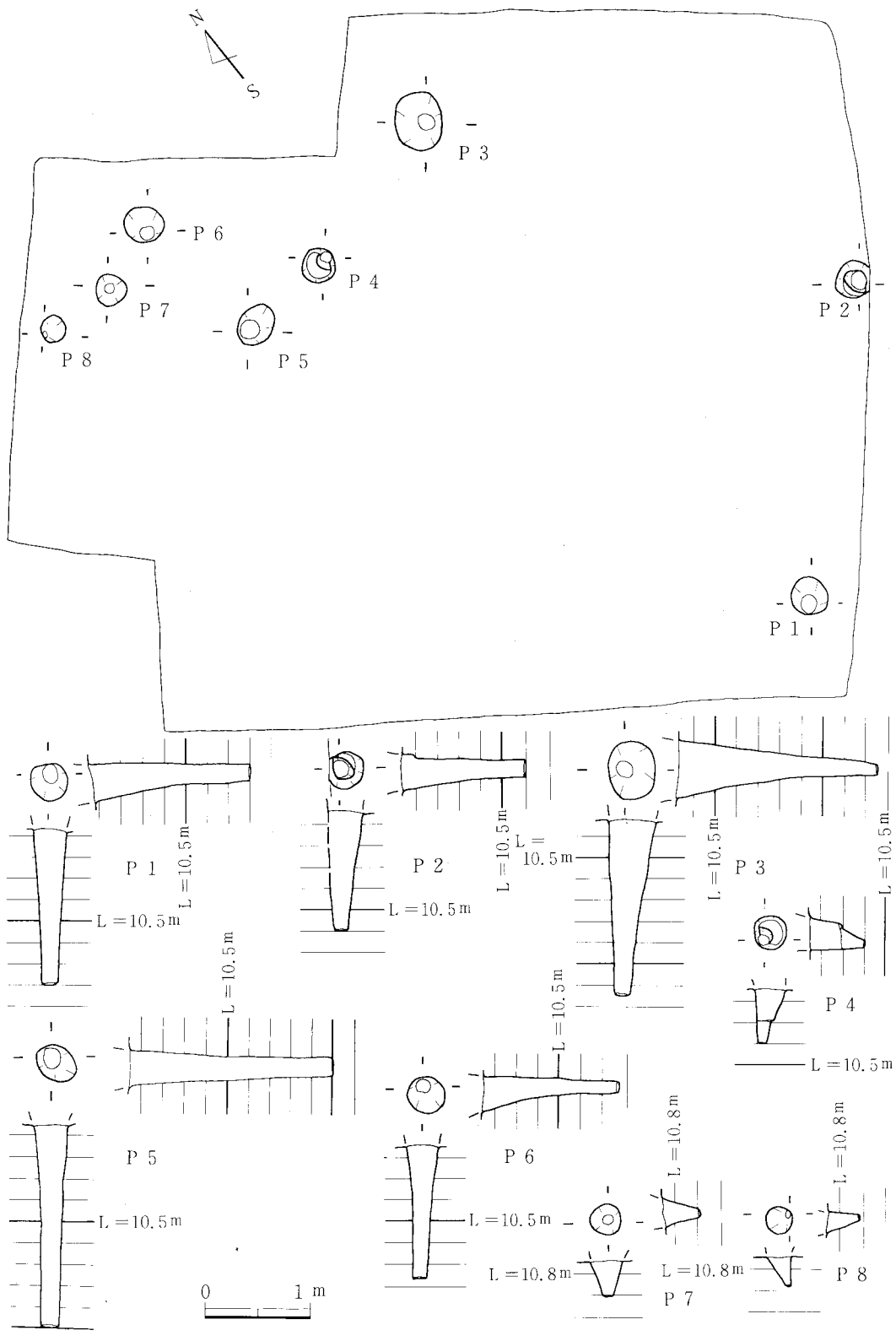
(3) 第11層 b 出土遺物 (一)

第11層 b からは2点の遺物が出土した。いずれも極細片の土器であり時期等は不詳である。

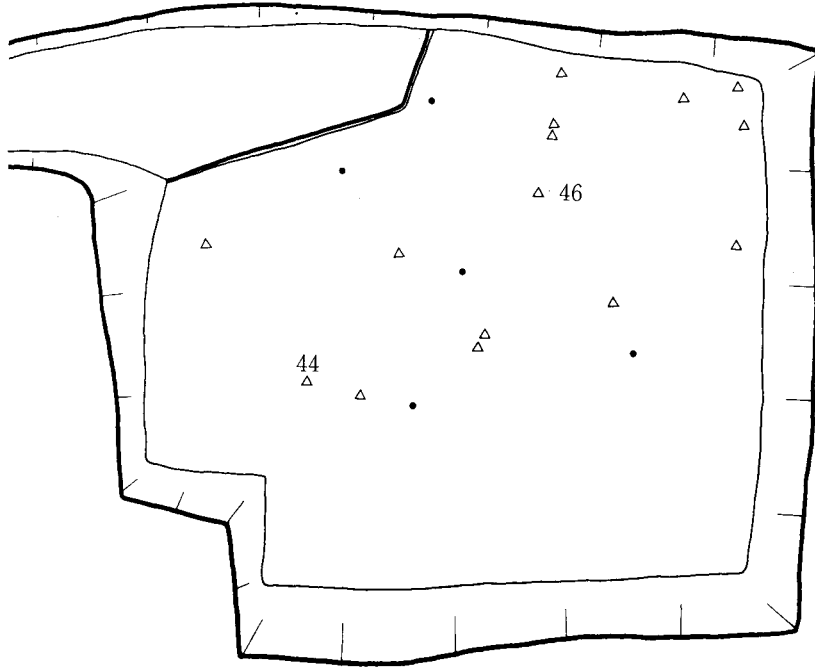


0 1 m

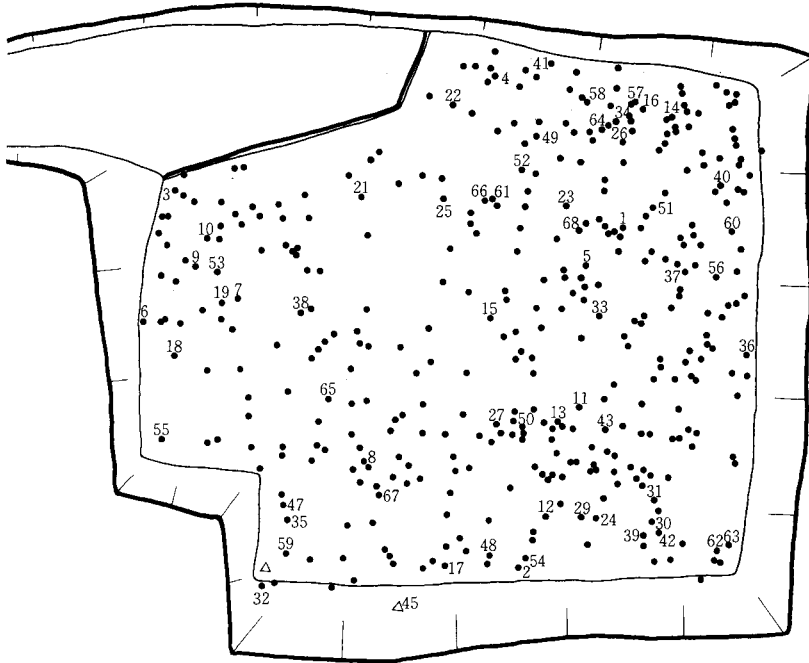
第2図 トレンチ層位断面図 (S=1/30)



第3図 遺構平面図及び断面図 (1/60)



第7層, 第9層 a, b 遺物出土狀況



第12層 a, b 遺物出土狀況



第4図 遺物出土狀況図 (S = 1/40)

(4) 第12層 a, b 出土遺物 (1~9, 11~69)

第12層 a, b からは縄文晩期の遺物を主体に、431点もの遺物が出土した。そのうち68点について図化を行った。以下、土器と石器に分けて述べたい。

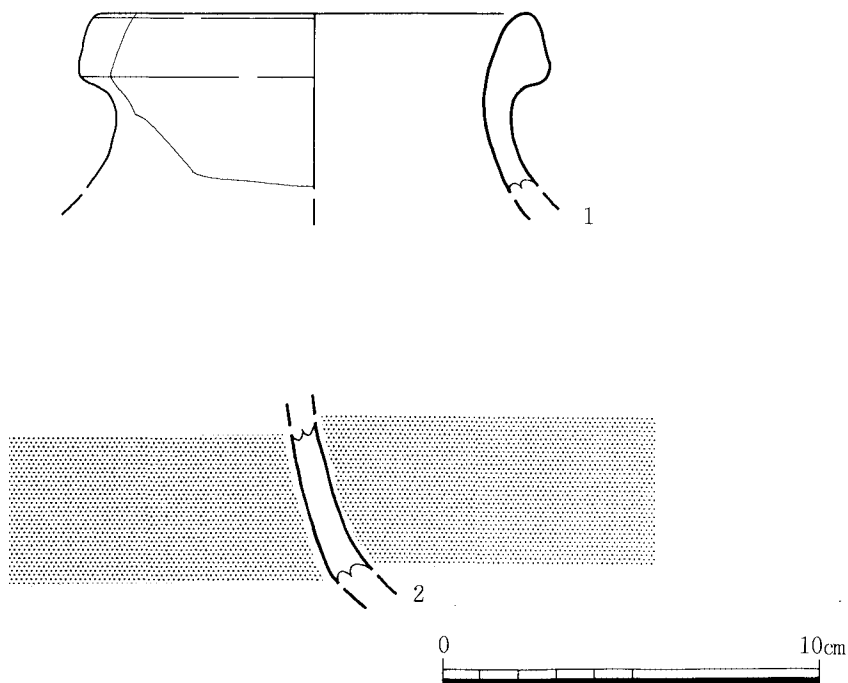
(i) 土器 (1~9, 11~43)

1は「宇宿上層式土器」無文壺形土器口縁部破片である。口縁部は外反し、口唇部外面は肥厚する。肥厚部分の断面形は「かまほこ」状ではなく、やや平坦に仕上げられる。口縁部径は復元径で11.4cmを測る。混和材には微砂粒が含まれるが、中でもウンモが多く、南西諸島で出土する。「宇宿上層式土器」に多く含まれる白色粒はほとんど見られない。

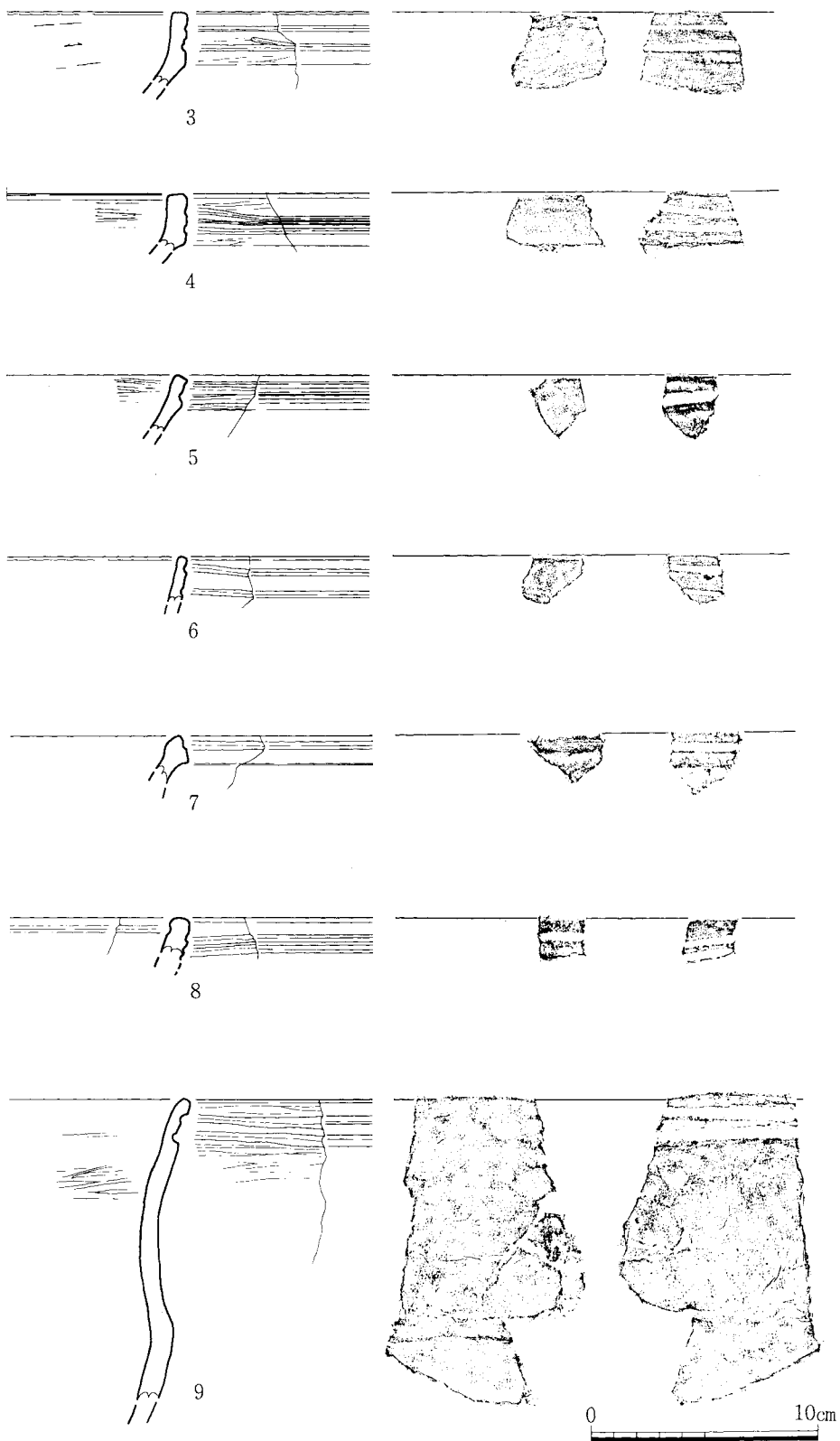
2は、内外面とも赤色塗彩の施される土器片で、器形からは壺形土器頸部または深鉢形土器胴部の可能性があるが、縄文時代晩期深鉢形土器に赤色塗彩を施す事例が乏しいため、壺形土器の可能性が高い。第12層 a, b では弥生時代以降の遺物の混在がなかったため、縄文晩期の刻目突帯文土器に伴う壺形土器の可能性もある。鹿児島県内における刻目突帯文土器に伴う壺の発見事例は、金峰町下原遺跡⁽¹⁾、末吉町上中段遺跡⁽²⁾ 等がある。これらのことから第12層は刻目突帯文土器の時期まで含む包含層の可能性が高い。

3~9は縄文時代晩期の深鉢形土器口縁部である。いずれも口縁部外面に文様帯を有し、文様帯には沈線による文様が施される。沈線は1条、2条、3条とバリエーションがあり、いわゆる「上加世田式土器」に帰属する。

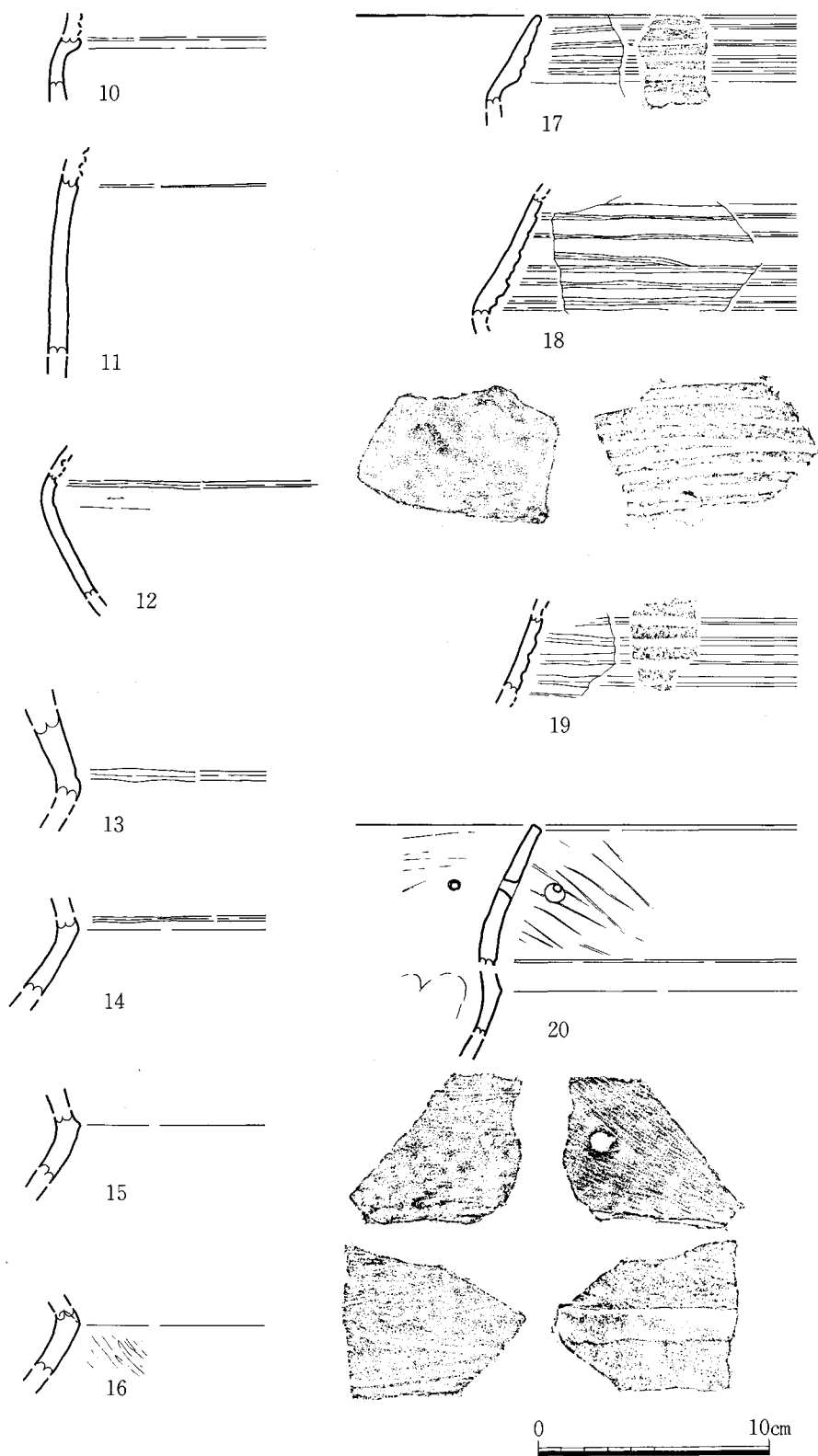
10~12は縄文時代晩期の深鉢形土器の胴部から口縁部に至る部分である。いずれも口縁部に文様帯を作り出すものと考えられ、文様の沈線の一部が残存する。



第5図 出土遺物実測図① (S=1/2)



第6图 出土遗物实测图② (S=1/3)

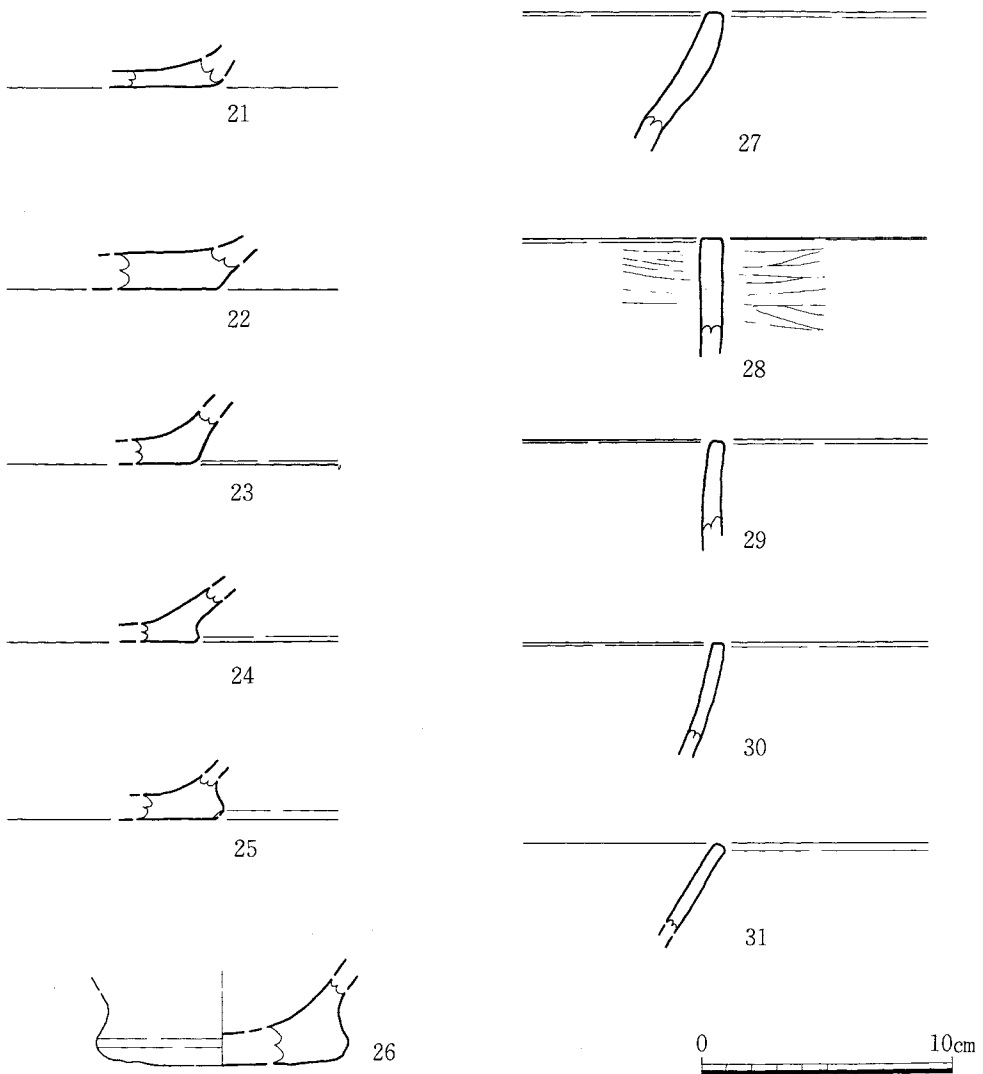


第7图 出土遺物実測図③ (S=1/3)

13～16は縄文時代晩期の深鉢形土器の胴部屈曲部で、13, 14などのように屈曲部直上に1条の沈線を施すものと15, 16のように沈線を施さないものがある。胴部屈曲部の沈線を施す伝統は縄文時代後期における「三万田式土器」⁽¹⁾や「御領式土器」に求められ、その消失期はいわゆる「上加世田式土器」の段階と考えられる。

17～19は、縄文時代晩期の深鉢形土器口縁部および口縁部文様帯である。17, 19は4条の沈線を、18は8 + α 条（多条）の沈線をもって文様とする。口縁部文様帯の幅が広がり、外傾化する傾向は、「上加世田式土器」に後続する「入佐式土器」の特徴と考えられ、これらの土器は3～9に比べ後出のものと考えられる。

20は縄文時代晩期深鉢形土器口縁部で、胴部に屈曲部を有する。かつて文様帯であった口縁部肥



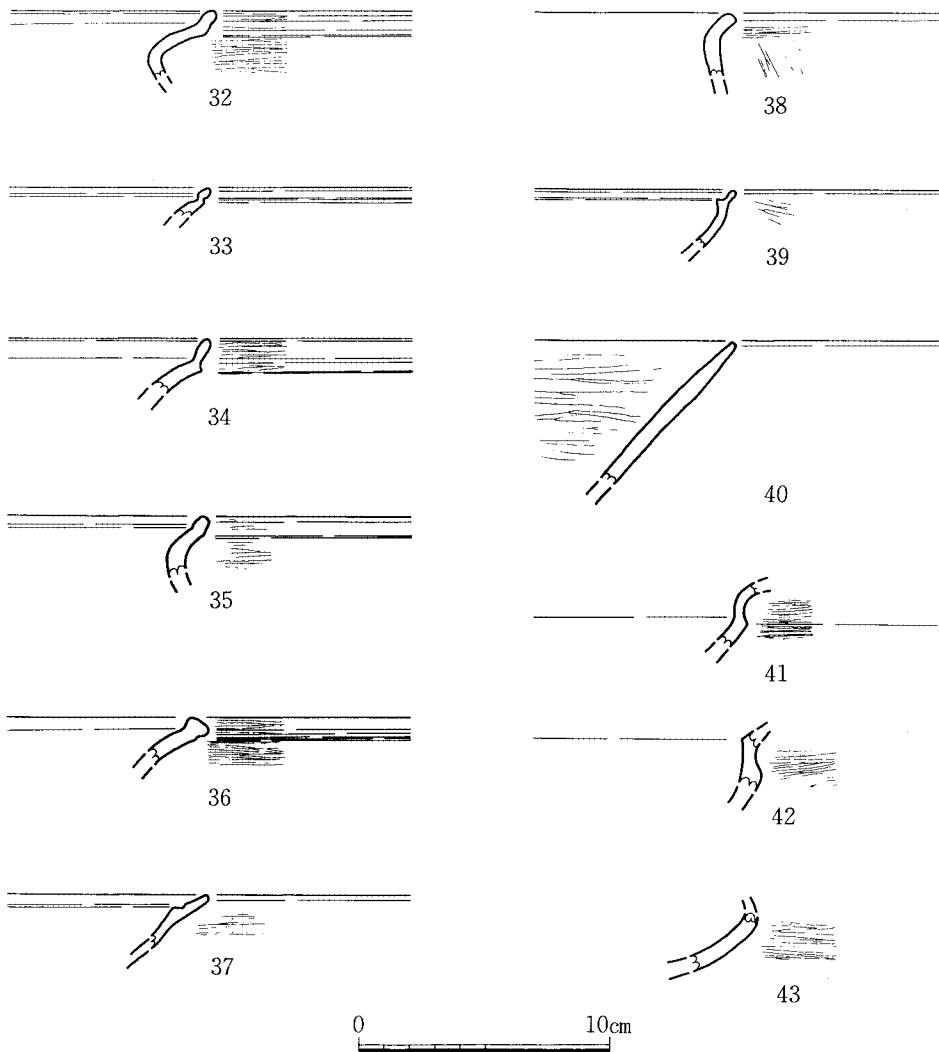
第8図 出土遺物実測図④ (S=1/3)

厚の痕跡がその屈曲部の直上部分に残存するが、文様は完全に消失している。これは「黒川式土器」の古期に属するものであると考えられる。口縁部下には焼成後の穿孔が施されている。

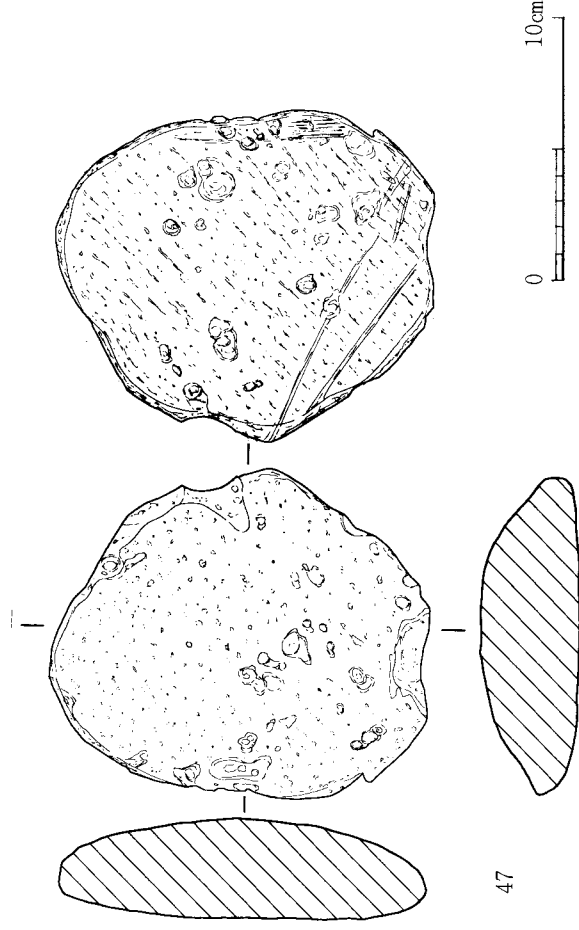
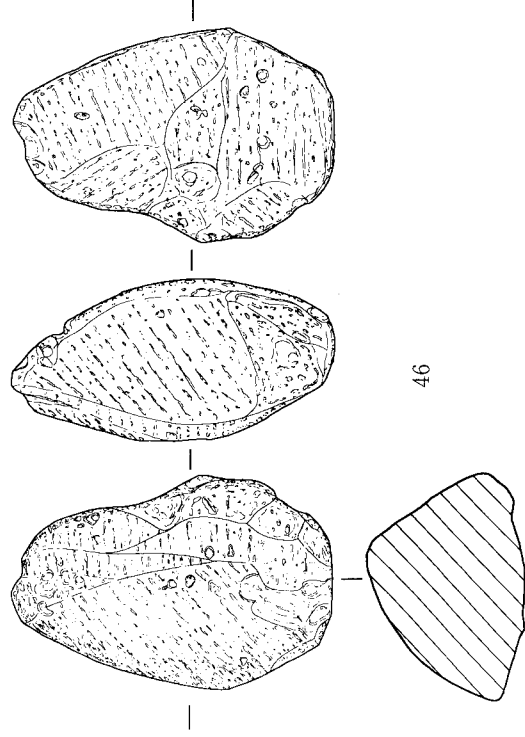
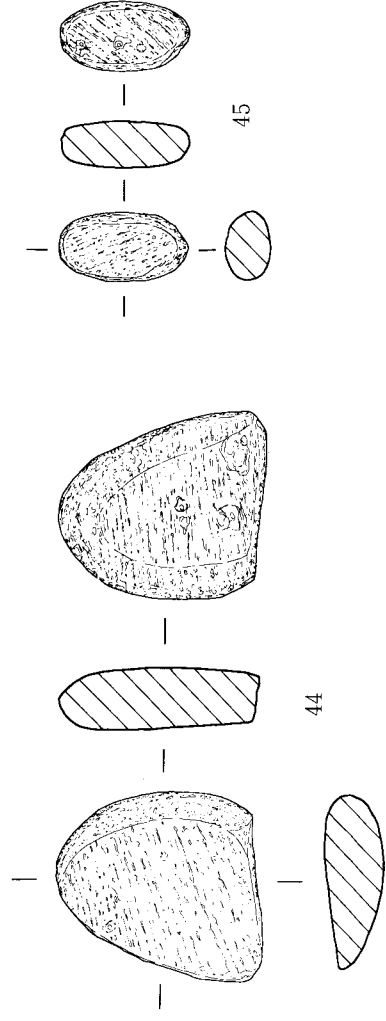
21～26は縄文時代晩期深鉢形土器底部である。九州の縄文晩期土器は縄文後期の「三万田式土器」以来のあげ底が消失する段階にあり、21～23のような平底へ移行したのち、24～26のような「張り出し底」へ変化する。これら資料は概ね九州の縄文晩期深鉢形土器の型式変化に連動したものと見える。

27は、縄文時代晩期深鉢形土器の無文のものである。28～31は深鉢または鉢形土器口縁部である。28～30は口唇部上面を平坦に仕上げる。⁽³⁾

32～39は縄文時代晩期精製浅鉢形土器口縁部である。また、41～43は同じく精製浅鉢形土器の胴



第9図 出土遺物実測図⑤ (S=1/3)



第10图 出土遺物実測図⑥ (S=1/3)

部屈曲部である。

40は半粗半精製鉢形土器で、内面はていねいなミガキが施され、外面はナデ調整が施される。

(ii) 石器 (44~69)

a. 軽石加工品 (44~48)

44~48は磨面を有する軽石加工品で、47、48は刻線が見られる。

b. 敲石 (49)

49は自然小礫の周縁に敲打痕が見られ、敲打の際の剝離面が認められる。

c. 石錘 (50)

50は打製石錘で、自然礫を利用し長軸端部に剝離を施したものである。(文責 下山)

d. 打製石斧 (51~57, 59) および調整剥片 (60~62)

51, 52, 54, 56, 57, 59は打製石斧であり、53, 55は扁平打製石斧である。51, 52は未成品と考えられる。54, 56, 57は抉り部分より欠損し、59は欠損した刃部と思われる。

60~62はこれらの打製石斧の調整剥片の可能性が高いと考えられるが、この剥片のエッジ部分を刃部として利用した使用痕のある剥片の可能性はある。

58は推定する形態から石斧の調整剥片を素材としたスクレイパーの可能性が高い。

いずれも粘板岩、若しくは頁岩を用いるものである。

e. 黒曜石石核 (63, 65, 66) および黒曜石剥片 (64)

63は横長の円形を呈する石核で、上面の原石の自然面を打面とし、周縁部からの剝離を施す。

66は幅広の剥片を剝離した石核と考えられる。剝離面の状態から打点をランダムに転移しながら、剝離したものであり、良好の剥片はあまり剝離されていない。

64は幅広の不定形剥片である。表面の状態から、自然面に覆われた両設打面を有する石核から剝離されたものと推測出来よう。打面は自然面である。

65は厚みのある幅広の剥片であり、不定形の形状を呈した石核から剝離されたものである。打面と表面左側部は欠損しているが、それが、自為的なものかどうかは不明である。

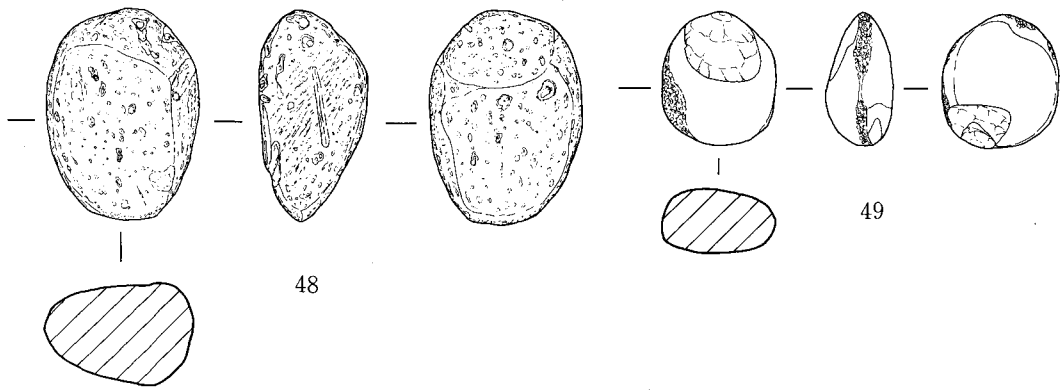
67と68は石鏃である。67は平基式であり、基部のえぐりの部分の調整はおおまかである。68は、先端部が欠損しており、欠損面及び、表裏面の調整痕のあり方から、使用時の際に欠損したものと考えられる。基部のえぐりの部分はさほど深くはない。

f. 磨石 (69) 厚さ14cm以上の楕円形の原石の欠損部の一部を用いた平端部に擦痕が認められる。なお、裏面には敲打痕も認められ、台石として利用された可能性も考えられる。(文責 鎌田)

(1)鹿児島県考古学会 1988「鹿児島県下の縄文晩期遺跡」

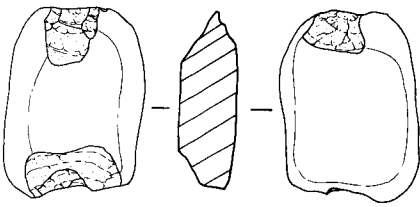
(2)末吉町教育委員会 1986「上中段遺跡・仮牧遺跡・五位塚渡り下遺跡・下ノ窪遺跡・小中野原遺跡」

(3)下山 覚 1988『九州縄文晩期の深鉢形土器の型式変化について』「人類史研究」第7号 人類史研究会

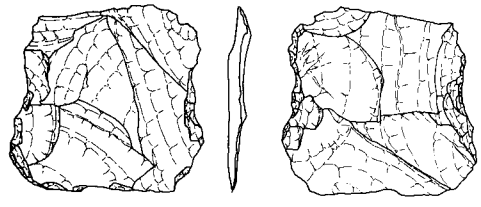


48

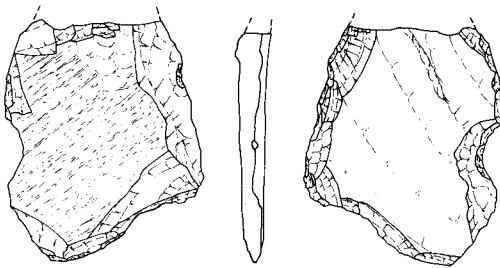
49



50



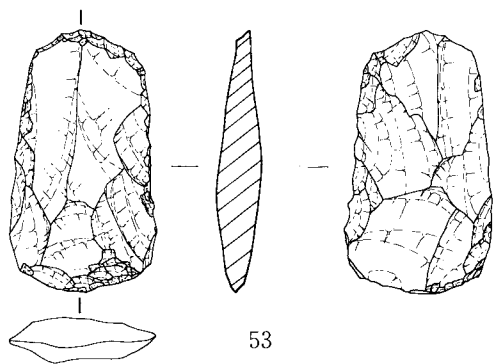
51



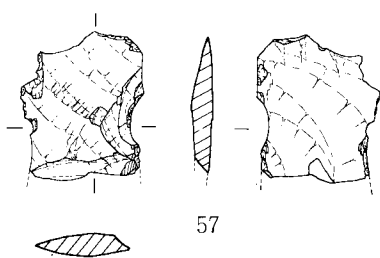
52

0 10cm

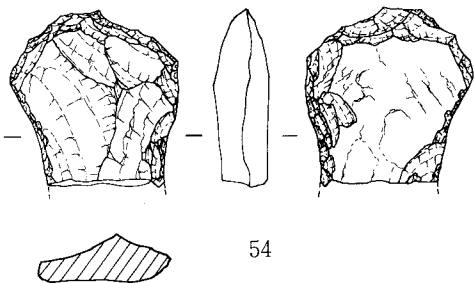
第11图 出土遺物実測图⑦ (S=1/3)



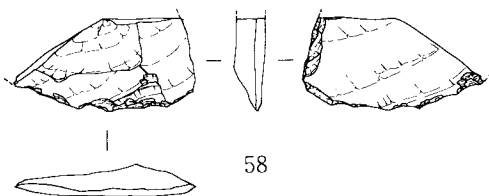
53



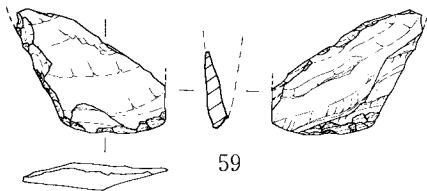
57



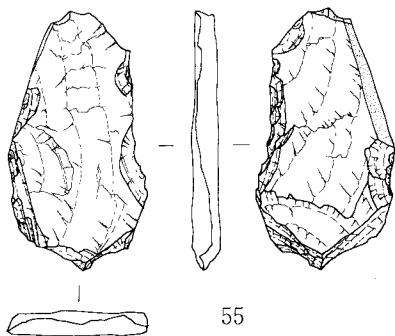
54



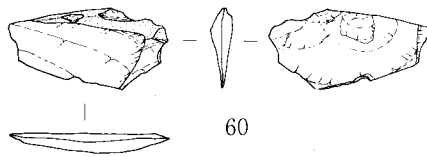
58



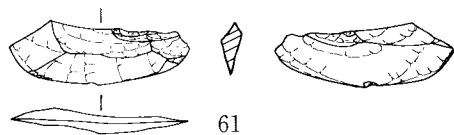
59



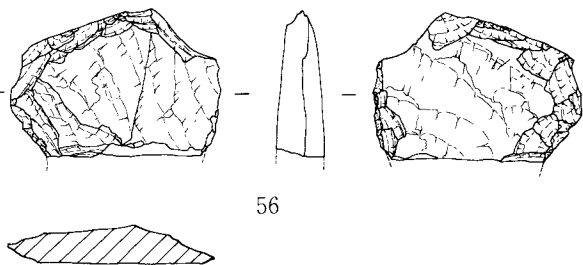
55



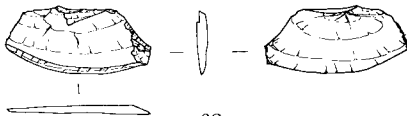
60



61



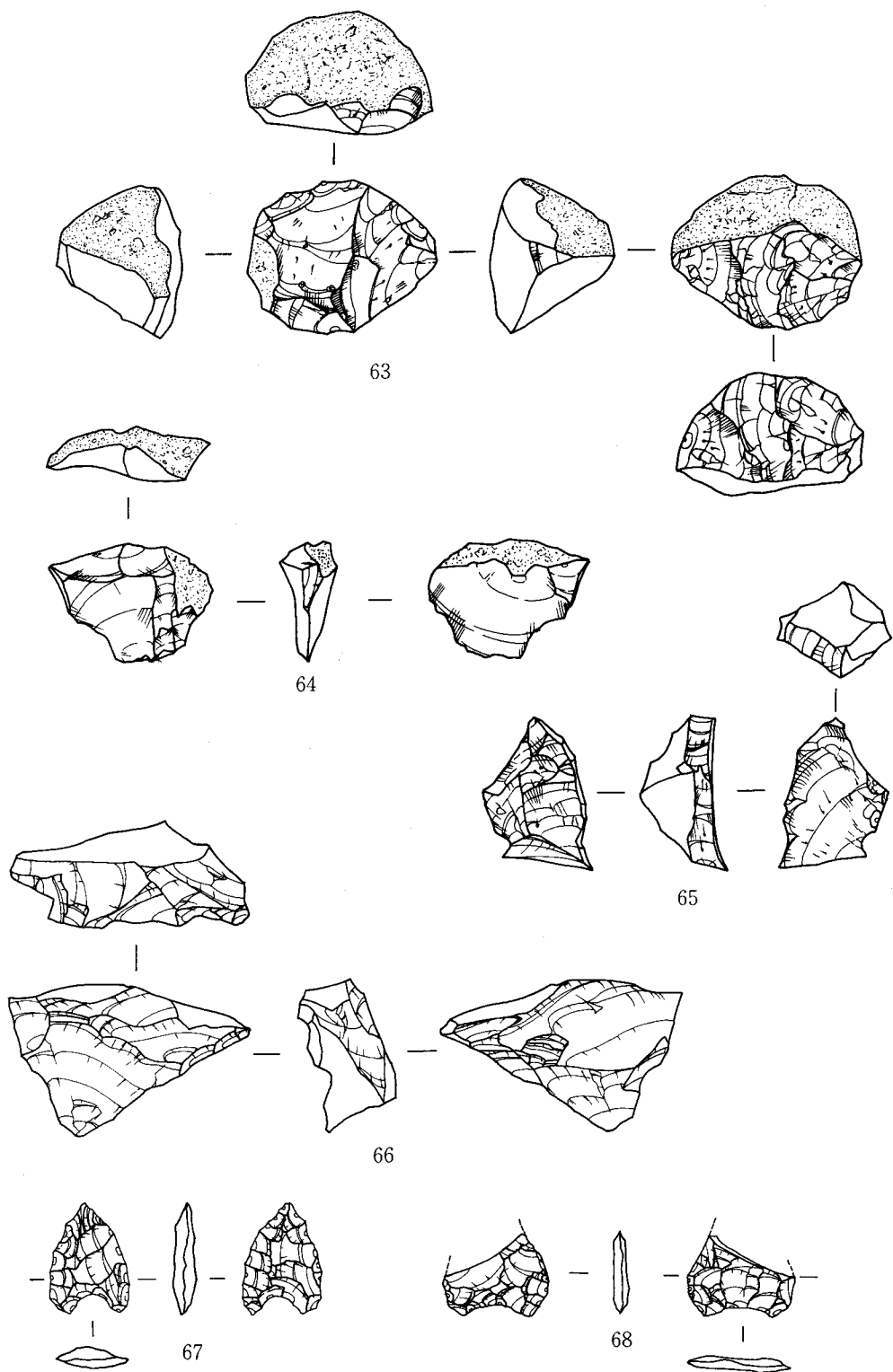
56



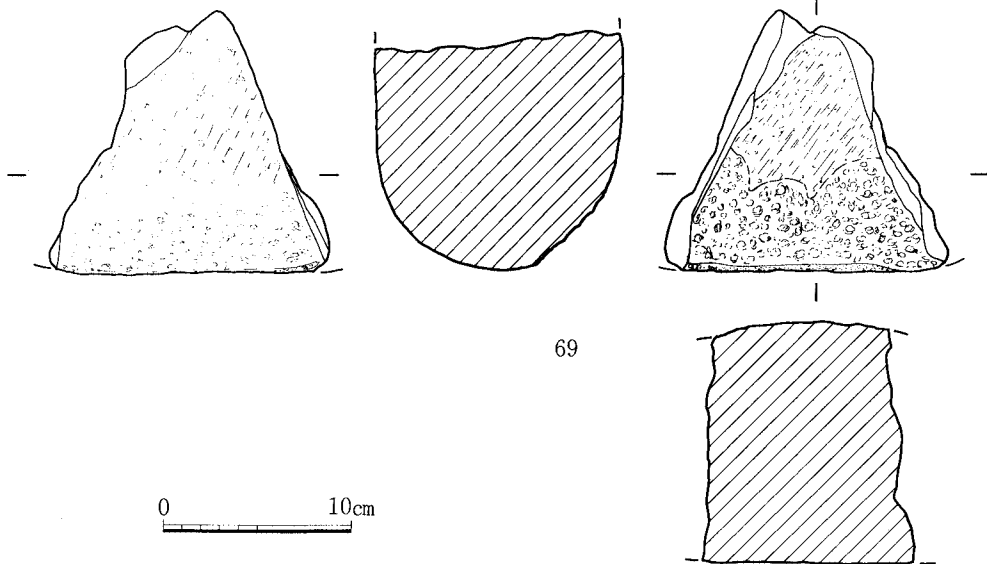
62



第12图 出土遗物实测图⑧ (1/3)



第13图 出土遺物実測図⑨ (S=1/2)



第14図 出土遺物実測図⑩ (S = 1 / 4)

第2表 出土遺物観察表①

図番	取上No	残存・分量	器種	部位	色 ㊶	色 ㊷	色 ㊸	色 ㊹	胎土粒	混和材	調整	その他	出土層位	接合関係	レベル (m)
1	55	㊶1/8~1/7残存 ㊶11.2cm (復元)	字宿式 上層式		5YR 7/8 7.5YR 6/6	7.5YR 7/6	7.5YR 7/6 5Y 5/2		微砂粒を多く含む	-	㊶マメツ (ナデ?) ㊶マメツ (ナデ?) ㊶唇 マメツ (ナデ?)	反転	12 a		11.03
2	27	破片	壺形土器	頸部	10R 5/8 10R 4/6	10R 5/6	10YR 7/4 10YR 4/2 7.5YR 1.7/1		微砂粒を含む	-	㊶赤色塗彩, マメツ ㊶赤色塗彩, ややマメツ	傾き若干ギモン 刻目突帯文に伴う壺の可能性あり	12 a		10.938
3	377	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 7/6 7.5YR 4/6	5YR 7/6 7.5YR 4/6	7.5YR 6/6		微砂粒を含む	-	㊶工具によるナデ ㊶ケンマ ㊶唇 ナデ	傾きギモン 2 or 3条の凹線	12 a		10.636
4	360	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 7/6	5YR 7/6 2.5Y 5/1	5YR 7/6		微砂粒を含む	-	㊶ケンマ ㊶ケンマ ㊶唇 ケンマ	傾きギモン 3条の凹線	12 b		10.70
5	80	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 4/3 5YR 2/1	5YR 5/4	10YR 4/1		微砂粒を含む	-	㊶ケンマ ㊶ケンマ ㊶唇 ケンマ	傾きギモン 2条の凹線	12 a		10.99
6	124	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 7/4	7.5YR 7/4 7.5YR 6/4	10YR 5/2		微砂粒を含む	-	㊶ナデ ㊶ナデ ㊶唇 ナデ	傾き不明 2 + a条の凹線	12 a		10.966
7	172	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 7/6	7.5YR 7/6 7.5YR 5/4	10YR 4/2		微砂粒を含む	-	㊶ややマメツ ㊶ややマメツ ㊶唇 ややマメツ	傾きギモン 1条凹線	12 a		10.92
8	107	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 6/6 2.5YR 4/1	5YR 6/6 2.5YR 4/1	5YR 5/8 2.5YR 4/1		微砂粒を含む	-	㊶ナデ ㊶ナデ ㊶唇 ナデ	傾き不明 2 + a条の凹線	12 a		11.025
9	429	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	10YR 3/1 5YR 5/4	5YR 4/2 5YR 5/2	7.5YR 7/6 10YR 6/3		微砂粒を含む	㊶他	㊶ケンマややマメツ ㊶ケンマややマメツ ㊶唇 ケンマややマメツ	傾き若干ギモン 2条の凹線	12 b		10.603
10	20	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 6/6	7.5YR 8/4	7.5YR 7/6		微砂粒を含む	-	㊶ややマメツ ㊶ケンマ	傾きギモン	9 a		11.672
11	332	破片	深鉢形器 (縄文晩期)	頸部	5YR 4/1 7.5YR 6/4	7.5YR 6/4 10YR 5/1	10YR 5/1 7.5YR 6/4		細砂粒を含む	㊶他	㊶工具によるナデ ㊶工具によるナデのちナデ	傾きギモン	12 b		10.656

第3表 出土遺物観察表②

図番	取上No	残存・法量	器種	部位	色④	色⑤	色⑥	色⑦	胎土粒	混和材	調整	その他	出土層位	接合関係	レベル (m)
12	238	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	頸部	10YR 2/2	10YR 7/3 5YR 4/1	10YR 6/3 N 2/0		微砂粒を 含む	④他	④ナデ ⑤工具によるナデ	傾きギモン	12 b		10.689
13	415	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	胸部屈 曲部	7.5YR 7/4 2.5YR 4/1	7.5YR 7/3 7.5YR 3/1	10YR 7/3 10YR 4/1		微砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤ナデ	傾きギモン	12 b		10.598
14	130	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	胸部屈 曲部	7.5YR 7/6 7.5YR 5/2 10YR 4/1	5YR 4/3 7.5YR 6/4	7.5YR 6/4 10YR 4/1		細砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤ナデ	傾き若干ギモン	12 a		10.971
15	244	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	胸部屈 曲部	10YR 7/4 10YR 4/2	7.5YR 5/3 10YR 5/3	10YR 7/4		微砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤ナデ	傾きギモン	12 b		10.775
16	48	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	胸部屈 曲部	5YR 6/6	7.5YR 6/4	7.5YR 6/6 2.5YR 6/3		微砂粒を 含む	—	④ケンマやヤマメツ ⑤ケンマやヤマメツ		12 a		11.016
17	248	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 1.7/1 7.5YR 3/2	5YR 6/4 5YR 2/1	7.5YR 7/3 7.5YR 2/1		微砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤工具によるナデのち凹 線, 工具によるナデ 口唇 ヨコナデ	傾きギモン 4条の凹線	12 b		10.58
18	282	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 5/3 7.5YR 3/1	7.5YR 6/3 5Y 3/1	7.5Y 2/1		微砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤ナデ	傾き若干ギモン 8 + α条の凹線	12 b		10.712
19	119	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 4/1 7.5YR 5/3	7.5YR 4/2 7.5YR 5/6	7.5YR 4/2 5Y 4/1		微砂粒を 含む	④他	④ケンマ ⑤ナデ	傾きギモン 5 + α条の凹線	12 a		10.993
20	302	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 5/4 10YR 4/1	10YR 6/3 7.5YR 3/4	10YR 6/3 7.5YR 6/6		砂粒を若 干含む 細砂粒を 含む	④⑤ クワンモ 他	④工具によるナデのちナデ ⑤工具によるナデのちナデ 口唇 工具による ナデのちナデ	傾き若干ギモン 焼成後穿孔あり	12 b	308.324	10.709
21	419	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	10YR 7/3 7.5YR 7/4	2.5Y 6/1 7.5YR 5/6	7.5YR 7/4		微砂粒を 含む	—	④ナデ ⑤ナデ ⑥無調整		12 b		10.625
22	445	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	2.5YR 5/8 5YR 2/1 5YR 6/6	5YR 4/8 7.5YR 1.7/1	5YR 6/6 5YR 2/1		砂粒を若 干含む 細砂粒を 含む	④⑤ 他	④ケンマ ⑤ナデ ⑥ナデ		12 b		10.495
23	53	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	5YR 6/6	7.5YR 6/6	5YR 6/6 7.5YR 6/6		細砂粒を 含む	④⑤ 他	④ナデ ⑤ナデやヤマメツ ⑥ナデやヤマメツ		12 a		11.035
24	442	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	10YR 7/3 2.5YR 7/8	5YR 4/2	2.5YR 7/8 2.5Y 3/1		微砂粒を 含む	④他	④ケンマ ⑤ナデ ⑥ナデ		12 b		10.535
25	316	破片	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	7.5YR 5/4 5YR 6/6 5YR 3/2	10YR 7/4 10YR 2/2	10YR 6/3 10YR 3/1		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	④他	④ナデ ⑤ナデ ⑥ナデ		12 b		10.711
26	293	④1/3残 存 ⑤10.0cm (復元)	深鉢形 土器 (縄文晩期)	底部	5YR 6/6 10YR 7/3 7.5YR 3/2	10YR 2/1 5YR 3/3	5YR 3/6 5YR 3/2		砂粒を含 む 細砂粒を 含む	④⑤ クワンモ 他	④ナデ ⑤ナデ ⑥無調整	反転	12 b		10.709
27	234	破片	深鉢形 土器 の鉢 形土器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 2/1 10YR 7/4	2.5Y 2/1 7.5YR 5/3 7.5YR 4/2	5YR 2/1 10YR 7/4		微砂粒を 含む	—	④工具によるナデやヤ マメツ ⑤工具によるナデ 口唇 ヨコナデ	傾き若干ギモン	12 b	250	10.75
28	301	破片	深鉢形 土器(?) (縄文晩期)	口縁部	10YR 7/3 7.5YR 4/3	7.5YR 7/3	10YR 7/3 2.5Y 5/2		微砂粒を 含む	—	④ケンマ ⑤ケンマ 口唇 ケンマ	傾きギモン	12 b		10.762
29	23	破片	深鉢形土 器(?) (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6 2.5Y 4/1		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	クワンモ 他	④ナデ ⑤工具によるナデ 口唇 工具によるナデ	傾きギモン	12 b		10.795
30	265	破片	深鉢形 土器(?) (縄文晩期)	口縁部	5YR 5/2 7.5YR 6/6 7.5YR 3/1	7.5YR 6/6 5G 3/2	N 2/0 10YR 6/6		微砂粒を 含む	—	④工具によるナデのちナデ ⑤工具によるナデのちナデ 口唇 ヨコナデ	傾きギモン	12 b		10.702

第4表 出土遺物観察表③

図番	取上No	残存・分量	器種	部位	色 ㉞	色 ㉟	色 ㊱	色 ㊲	胎土粒	混和材	調整	その他	出土層位	接合関係	レベル (m)
31	22	破片	深鉢形土器 (?)	口縁部	2.5YR 7/2 7.5YR 5/6	7.5YR 5/6 5Y 4/1	2.5YR 3/1 7.5YR 5/6		微砂粒を含む	—	㉞工具によるナデのナデ ㉟工具によるナデのナデ 口唇 ヨコナデ	傾きギモン	12 b		10.793
32	434	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 2/1 7.5YR 4/2	7.5YR 4/2 7.5YR 3/1	7.5YR 2/1 7.5YR 7/4		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマ ㉟黒色ケンマ 口唇 黒色ケンマ	傾きギモン	12 b		10.595
33	137	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	10YR 6/2 10YR 7/4	7.5YR 8/4 10YR 7/2	10YR 8/4 7.5YR 4/1		微砂粒を含む	—	㉞ややマメツ ㉟ややマメツ 口唇 ややマメツ	傾きギモン	12 a		10.962
34	309	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 6/4	7.5YR 6/4 7.5YR 5/2	10YR 5/2 5YR 6/6		微砂粒を含む	㉞ 他	㉞ケンマ ㉟ケンマ 口唇 ケンマ	傾きギモン	12 b		10.685
35	35	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	2.5YR 3/1 10YR 4/2	2.5YR 3/1 10YR 6/3	10YR 6/3 5Y 2/1		微砂粒を含む	㉞ 他	㉞ややマメツ ㉟黒色ケンマ 口唇 黒色ケンマ	傾きギモン	12 a		10.912
36	205	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 4/3 5YR 3/1	5YR 4/3 5YR 3/1	5YR 5/8 5YR 4/3		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマ ㉟黒色ケンマ 口唇 黒色ケンマ	傾き若干ギモン	12 b		10.772
37	198	破片	浅鉢形土器 (縄文晩期)	胴部屈曲部	10Y 5/1 10YR 4/4	10YR 8/3 10YR 4/4 7.5Y 5/1	10YR 8/4 10YR 3/1		微砂粒を含む	㉞ 他	㉞ケンマややマメツ ㉟ケンマややマメツ	傾き若干ギモン	12 b		10.814
38	453	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	7.5YR 3/1 7.5YR 3/4	5YR 4/3	7.5YR 4/3		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマ ㉟黒色ケンマ 口唇 黒色ケンマ	傾き若干ギモン	12 b		10.525
39	441	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	2.5Y 4/1 10YR 6/6	N 4/0 10YR 6/6	10YR L7/1 10YR 6/6		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマ ㉟黒色ケンマ 口唇 黒色ケンマ	傾きギモン	12 b		10.50
40	348	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	口縁部	5YR 2/1	10YR 2/1	10YR 2/1 7.5YR 5/2		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマ ㉟ナデ 口唇 黒色ケンマ	傾き若干ギモン	12 b		10.616
41	443	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	胴部屈曲部	7.5YR 6/4 7.5YR 5/6 7.5YR 2/1	5Y 3/1	7.5Y 3/1 N 3/0 10YR 7/4		微砂粒を含む	—	㉞黒色ケンマややマメツ ㉟黒色ケンマ	傾き若干ギモン	12 a		10.973
42	325	破片	浅鉢形土器 (縄文晩期)	胴部屈曲部	2.5YR 6/6 7.5YR 7/6	N 3/0 10YR 6/2	7.5YR 7/6 2.5Y 5/2		微砂粒を含む	—	㉞ケンマややマメツ ㉟ケンマ	傾き若干ギモン	12 b		10.6
43	333	破片	精製浅鉢形土器 (縄文晩期)	胴部	10YR 2/1	N 2/0	10YR 3/1		微砂粒を含む	—	㉞ケンマ ㉟ケンマ	傾き若干ギモン	12 b		10.636

第5表 出土遺物観察表④

図番	取上No	残存・分量	器種	部位	材質	調整	その他	出土層位	接合関係	レベル (m)
44	19	完形 ㉞80cm㉟7.3cm ㊱2.4cm㊲40g	軽石加工品		軽石			9		11.556
45	33	完形 ㉞5.1cm㉟2.75cm ㊱1.85cm㊲9g	軽石加工品		軽石		全面磨かれている	11 b		11.143
46	14	完形 ㉞12.4cm㉟8.2cm ㊱6.2cm㊲118g	軽石加工品		軽石			9		11.516
47	390	完形 ㉞14.8cm㉟13cm ㊱3.95cm㊲210g	軽石加工品		軽石			12 b		10.607

第6表 出土遺物観察表⑤

図番	取上No	残存・法量	器種	部位	材質	調整	その他	出土層位	接合関係	レベル (m)
48	245	完形 ⊕8.15cm⊕6cm ⊕4.1cm⊕70g	軽石加工品		軽石			12 b		10.648
49	358	完形 ⊕5.2cm⊕4.5cm ⊕80g	—		石材		両面に磨面を形成する 側面は、打コン有、両端部 は大きく剥離する	12 b		10.677
50	232	完形 ⊕7.5cm⊕5.6cm ⊕2.3cm	石 錘		変成岩			12 b		10.682
51	409	未製品 ⊕7.2cm⊕6.5cm ⊕1.3cm(最大幅) ⊕91g	打製石斧		粘板岩 (?)		主要剥離面の他2次調整が 認められる	12 b		10.59
52	412	未製品 ⊕9cm⊕6.9cm ⊕109g	打製石斧		粘板岩 (?)		主要剥離面の他2次調整剥 離が認められる	12 b		10.585
53	430	完形 ⊕10.4cm⊕5.8cm ⊕1.8cm	打製石斧		粘板岩 (?)		鉄分が被覆している	12 b		10.615
54	241	欠損 残長 6.8cm 残短 6.6cm 残厚 2.1cm 残重 109g	打製石斧	基部	粘板岩 (?)			12 b		10.615
55	281	完形 ⊕10.1cm⊕5.4cm ⊕1cm ⊕78g	扁平打製 石 斧		粘板岩 (?)			12 b		10.695
56	405	欠損 残長 5.7cm 残短 8.1cm 残厚 1.55cm 残重 99g	打製石斧	基部	粘板岩 (?)			12 b		10.608
57	179	欠損 残長 5.6cm 残短 4.8cm 残厚 9mm 残重 30g	—		粘板岩 (?)			12 b		10.74
58	186	欠損 残長 3.6cm 残短 (刃部)7.2cm 残厚 1.1cm 残重 32g	スクレーパー		石材			12 b		10.845
59	391	欠損 残長 4.9cm 残短 4.2cm 残厚 1.1cm 残重 21g	打製石斧 (?)		粘板岩 (?)			12 b		10.628
60	59	— ⊕6.2cm⊕3.1cm ⊕7mm⊕12g	調整剥片		粘板岩 (?)			12 a		11.065
61	365	— ⊕8.1cm⊕2.3cm ⊕6mm⊕10g	調整剥片		粘板岩 (?)			12 b		10.685
62	21	— ⊕5.7cm⊕2.65cm ⊕4.5cm⊕9g	調整剥片		粘板岩 (?)			12 a		10.95
63	439	破片 ⊕2.8cm⊕2.25cm ⊕1.85cm	石 核		黒曜石			12 b		10.445
64	355	— ⊕2.3cm⊕1.8cm ⊕8mm	黒曜石剥片		黒曜石			12 b		10.673
65	438	— ⊕2.4cm⊕1.5cm ⊕1.1cm	黒曜石石核 (?)		黒曜石/ 気泡含		全面に不規則な剥離がみら れる	12 b		10.566
66	299	— ⊕2.2cm⊕3.5cm ⊕1.5cm	黒曜石石核		黒曜石/ 気泡含		黒曜石の風化面を残さず全面に剥 離が見られる。剥離の方向不規則 で打面の転移が顕著である	12 a		10.96
67	255	完形 ⊕1.62cm⊕1.15cm ⊕3.3mm	打製石鏃		変成岩系統の石材 (ホルンフェ ルス?)			12 b		10.775
68	191	破片 ⊕1.2cm⊕1.55cm ⊕2.5mm	石 鏃		黒曜石			12 b		10.82

第Ⅳ章 確認調査の成果

本確認調査では、古墳時代のピットが8基検出された。わずか12㎡の調査トレンチの中では、それらの対応関係については確認できなかった。しかし、この調査面積で8基のピットが検出されていることから、周辺に古墳時代遺構が多数埋蔵されていることはほぼ間違いないであろう。

ところで、本トレンチ第12層 a, b は縄文時代晩期の良好な包含層であり、多量の遺物が出土したことは注目される。特に、縄文時代の晩期のこの包含層から、本土で初めて「宇宿上層式土器」が発見されたことは注目に値する。

第12層 a, b では、縄文晩期初頭の「上加世田式土器」から、いわゆる「刻目突帯文土器」までを包含すると考えられ、宇宿上層式土器が縄文時代晩期に相当するものと判断された。しかし、宇宿上層式土器の上限、下限の問題については時間幅を持つ包含層からの出土であることから、もとより言及できず、この調査の成果からは、「『宇宿上層式土器』は九州縄文時代晩期土器と併行する時期がある」という言説に留めおくべきであろう。

それでも、本土において南西諸島の土器が出土したことの意義は大きい。この宇宿上層式土器が南西諸島から搬入されたものか、あるいは宇宿上層式土器にかかわる情報を持つ者が南摺ヶ浜遺跡において製作したものかにはわかに判別し難いが、胎土における差異に注目すれば、南西諸島の宇宿上層式土器には白色粒（石灰または貝殻片か？）の混入する土器が多いものの、本事例ではほとんど白色粒は含まれていない点から、直接の搬入品の可能性は低いように思われる。

南西諸島系と考えられる土器の北限例では、鹿児島県薩摩郡里村に所在する中町馬場遺跡⁽¹⁾において、面縄西洞式土器に近似する土器が発見されており、また、鹿児島県指宿市大渡遺跡⁽²⁾からは、縄文後期段階と思われる貝殻条痕を施す丸底の土器の底部が出土している。しかし、大渡遺跡の場合、早急に南西諸島の影響と考えるには不安な要素が大きいものがあったと考えられ、通説的には本土においての南西諸島土器の出土例は皆無であると一般的に考えられていた。

今回の宇宿上層式土器の出土により、本土における南島土器の存在の可能性が大きく広げられると同時に、今後の事例増加によって、南西諸島土器が九州本島の土器文化にどのような影響を与えたのかが明らかになるものと思われる。本事例を糸口に、九州の縄文時代研究では南西諸島からの視点について強調されるであろう。

さて、縄文時代晩期の遺物では、各種石器についても注目される。石錘、石鏃、扁平打製石斧等の出土は、この遺跡における立地に対し、その生業基盤をよく物語るものであろう。

石斧の製作についても貴重な資料が得られた。特に調整剥片の形態から、石斧の挟り部分の調整段階で得られたものと予想され、接合資料はなかったものの、今後注意深く観察していくことも必要であると考えられる。さらに、調整剥片のエッジを利用し、石器として用いた可能性もあり、石斧をめぐる製作体系の復元も重要な課題として提出された。⁽³⁾

南摺ヶ浜遺跡は以上述べたような課題に対する解答を秘めた遺跡であり、その意義は大きいものがある。今後も周到な注意をもってその保存に務めなければならないものと考えられる。

(文責 下山)

(1)鹿児島大学法文学部考古学研究室 1985『中町馬場遺跡』「鹿大考古」第3号所収

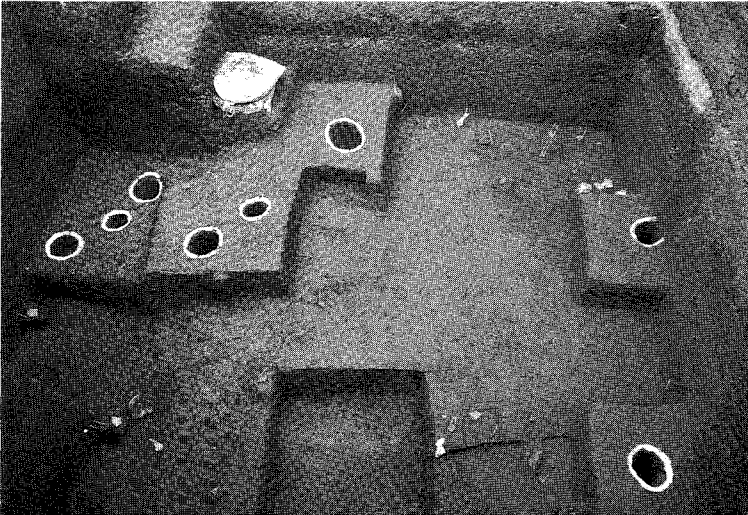
(2)指宿市教育委員会所有

(3)鎌田洋昭氏教示

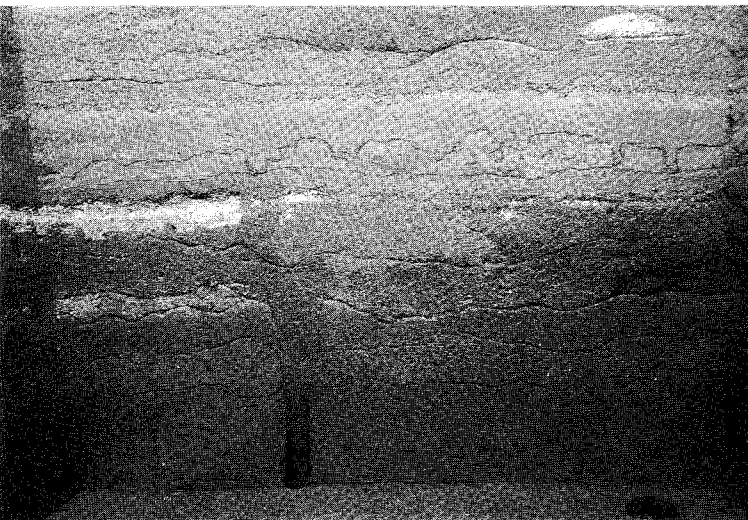
写真図版



1. 6層上面検出状況

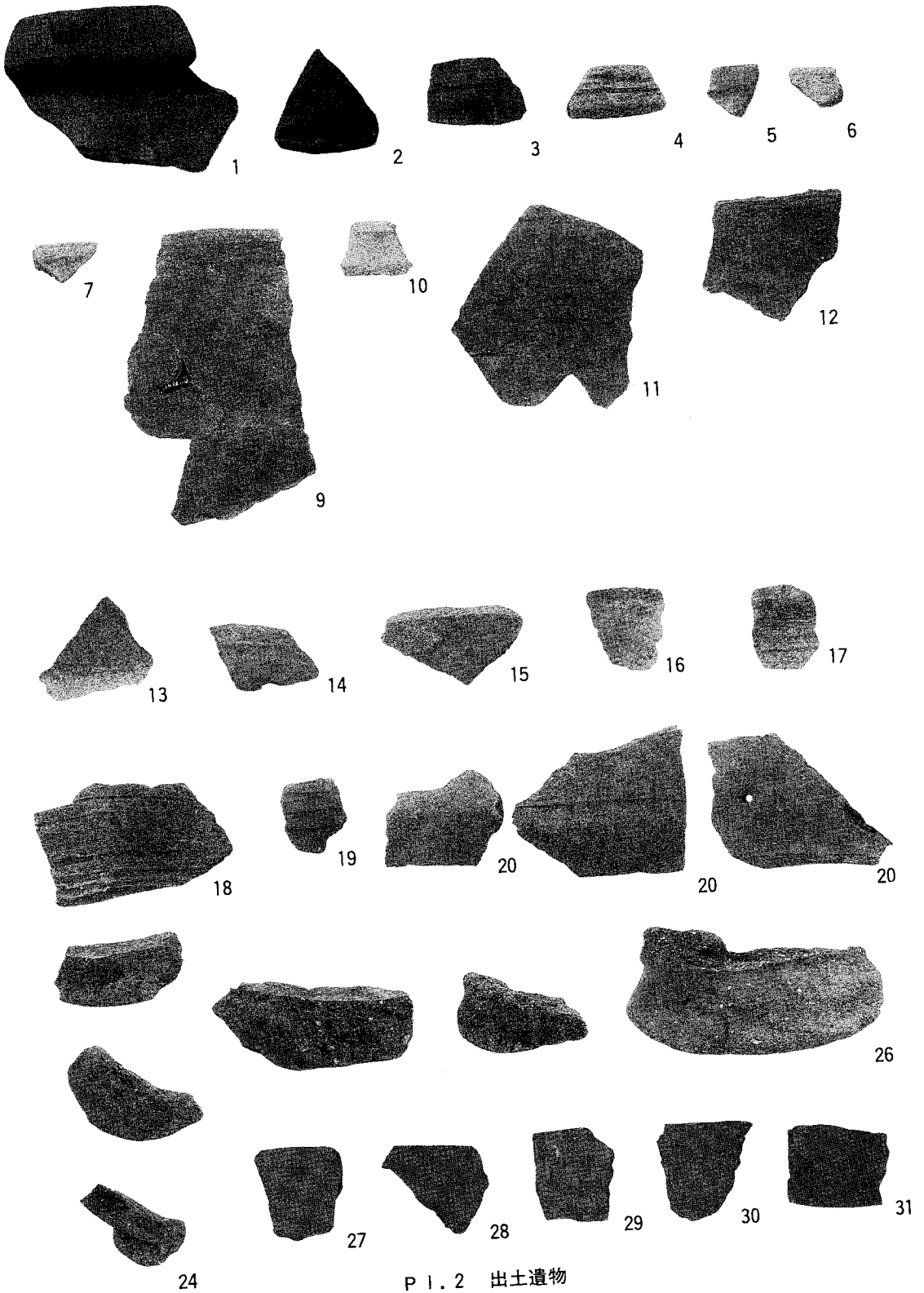


2. 遺構検出状況

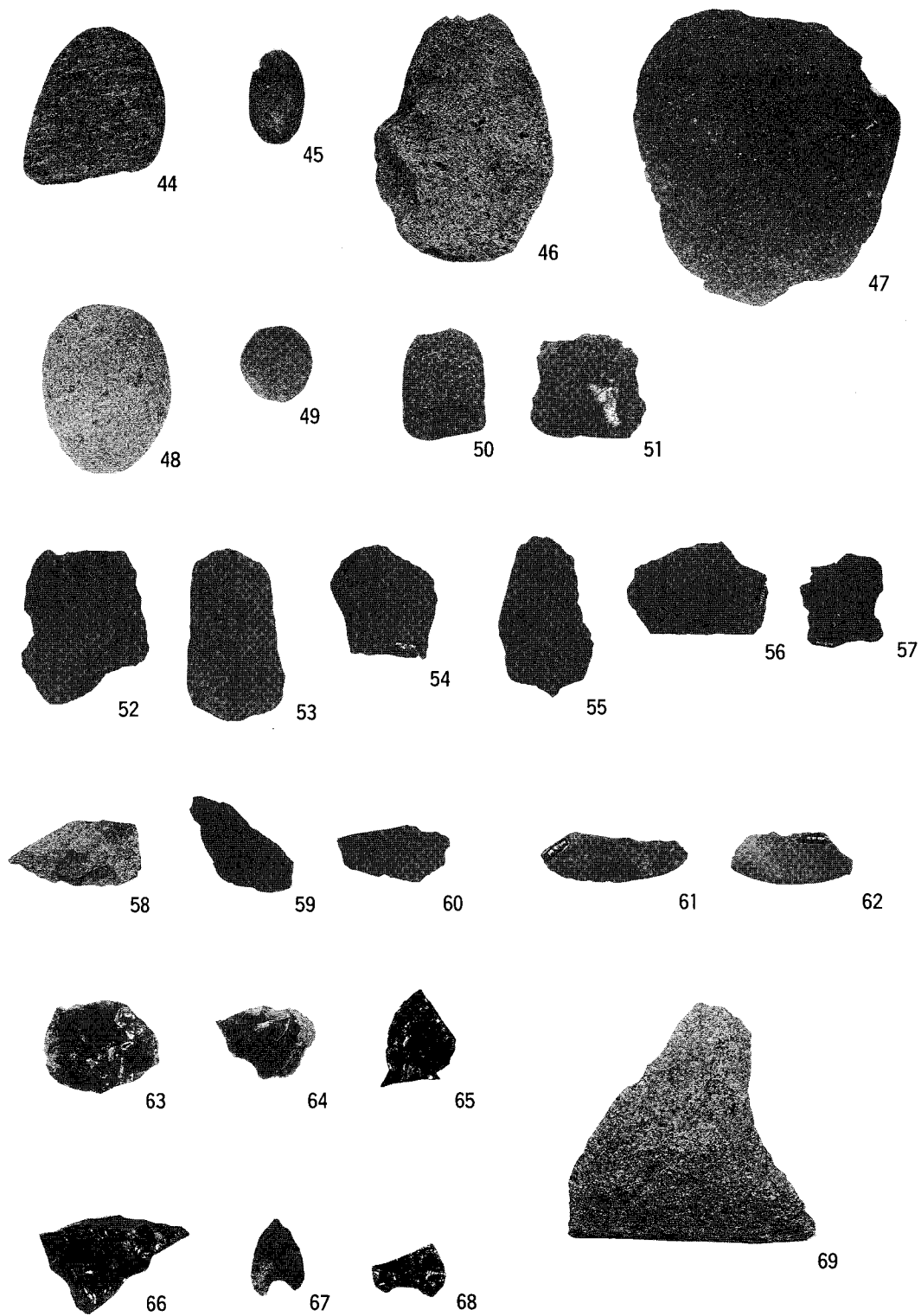


3. 南壁層位

P I . 1 現場写真



P I . 2 出土遺物



P I . 3 出土遺物

<SUMMARY>

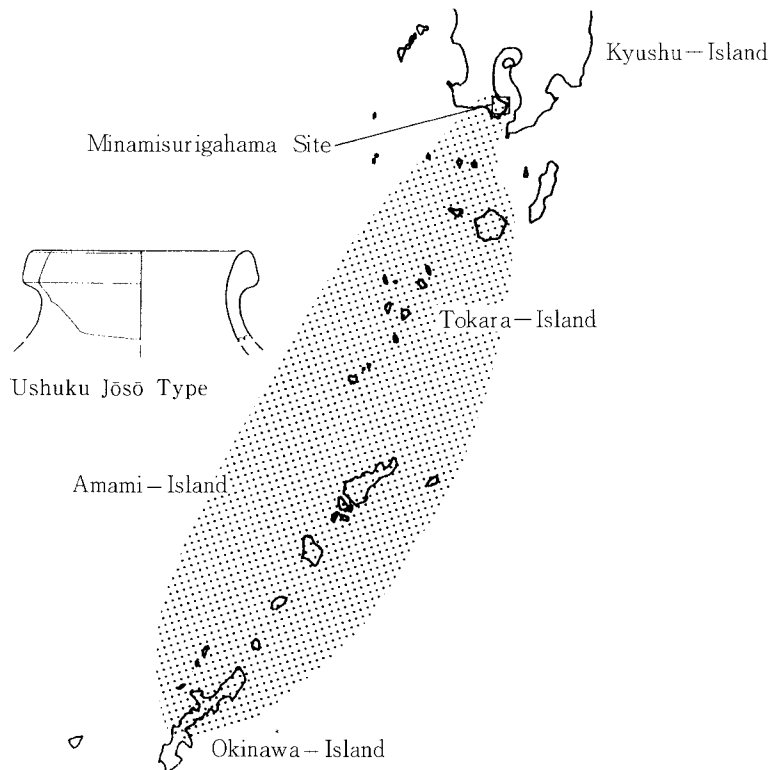
The archaeological site of Minamisurigahama is located at southern most tip of Kyushu island.

The site is located on the edge of an alluvial fan formed by volcanic activity which stretches from the hills to the shore. This site is located only 50 meters from the seashore.

From the last excavation we found two layers containing relics. They belonged to the Kofun-age and the last stage of the Jōmon-age (about B.C. 800~B.C. 400). We found eight pits of pottery originating from the Kofun-age in the within layer and in the 12th layer we found pottery and stone tools dating from the end of the Jōmon period.

An especially important find was uncovered—a piece of pottery belonging to the “Ushuku Jōsō type”. This type of pottery existed through the southwest islands. The discovery of this pottery at Minamisurigahama is the first such case in Kyushu island and is the furthest North such a discovery has been made.

We obtained some stone instruments which were used as weights for fishing nets, as well as arrow heads and stone axes estimated to be from the last stages of the Jōmon era. From this we believe that the ancient people who occupied this site engaged in fishing, hunting and perhaps small scale agriculture.



▣ The range of the Ushuku Jōsō type pottaries
(Original: Satoru SHIMOYAMA, Proofreading: Elizabeth A PEOPALL)

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

南 摺 ヶ 浜 遺 跡 Ⅱ

発 行 指 宿 市 教 育 委 員 会
鹿 児 島 県 指 宿 市 十 町 2424

印 刷 朝 日 印 刷

MINAMISURIGAHAMA ARCHAEOLOGICAL SITE II

〈CONTENTS〉

- Chapter I ————— Pre – Excavation Development
Chapter II ————— Surroundings of the Site
Chapter III ————— Survey of the Site
Chapter IV ————— The Results of the Survey

〈SUMMARY〉

Reporter and Editor: S. Shimoyama, T. Watanabe, H. Kamada

Published by
The Board of Education of Ibusuki – City
Kagoshima Prefecture, Japan.